

平成19年度企画展

相馬御風と早稲田

(平成19年10月26日～11月25日)

詩人、叙情歌人、随筆家、作詞家、自然主義評論家、そして良寛研究の第一人者として、近代日本文学界に幾多の足跡を残した相馬御風。その才能が開花し、結実するうえで大きな糧となったのが、早稲田にかかわる文人たちとの出会いと交流でした。

今回の企画展では、御風が特にその影響を強く受けた在京期間を「早稲田大学時代」「早稲田文学社時代」「芸術座時代」の大きく3つに分け、その時代ごとに親交の厚かった人々を中心に約150点の資料を展示しました。加えて、早稲田における御風最大の功績といえる校歌「都の西北」の作詞にもスポットをあてました。

企画展開幕前日の10月25日には、共催事業として、早稲田大学学事顧問の奥島孝康氏(前・早稲田大学総長)による記念講演会『早稲田人の心の原点「都の西北」を開催。』

また11月4日には、早稲田大学校歌研究会座長の菊地哲榮氏を講師に迎えて特別講演会を開き、校歌の由来や歌詞に込められた思いなどについて、映像や音声なども使って、分かりやすくお話していただきました。

注目 恩師・島村抱月との出会い

御風の作風や人生観に最も大きな影響を及ぼした人物は、やはり島村抱月でしょう。

抱月は島根県那賀郡久佐村(現・浜田市)出身で、本名を佐々山瀧太郎といいます。明治24年に東京専門学校(現・早稲田大学)文学部に進学し、文学を坪内逍遙に、哲学を大西祝に学びます。この2人のいわゆる『愛弟子』であり、早稲田大学の本流を担う逸材として将来を期待されていました。

明治38年には3年半のイギリス、ドイツ留学を終えて帰国。母校の教壇に復帰し、美学や英文学史、欧州近世文芸史などを講じます。さらに翌39年1月、逍遙の依頼を受けて『早稲田文学』を再刊しました。

抱月の講義に感銘を受けた御風は明治39年、片上天弦、白松南山らとともに早稲田文学社に入社。これより大正5年に糸魚川に帰るまでの約10年間、抱月から「適切な、周到な、温情のこもった教え」を受けることになりました。

この2人の師弟関係について、大学の同級生で新潟県出身の文人・会津八一は、「相馬君あたりは、物の見方、考え方、書き方などについて、この人(抱月)に最も深く傾倒して、大きな影響を受けたらしい」(『野を歩む者・御風追悼号』昭和25年5月)と振り返っています。また、御風とともに早稲田

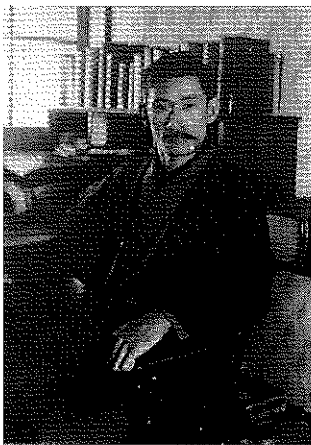
文学の編集にあたった中村星湖は、「相馬君が東京にゐた間は、先生(抱月)の出入進退には絶えず相馬君の心がもしくは姿が伴ってゐたと言つても好い」(『早稲田文学・島村抱月追悼号』大正7年12月)と述べています。

先生の抱月も、学生時代から優れた短歌や訳文などを雑誌に発表していた御風に一目置いていたのでしょう。明治40年の大学創立25周年記念事業として制定することになった校歌の作詞を弱冠24歳の御風に依頼しています。

この大役を受けた御風は約10日間、寝食を忘れて作詞に没頭します。大隈重信の建学の精神を反映するために逍遙や抱月、高田早苗などから意見を聞き、作曲を担当した東儀鉄笛とも相談を重ねました。

こうしてできた草稿に逍遙が筆を加え、壮重な八七調の歌詞が完成。これに当時の日本では馴染みの薄かった7音階の曲が付けられ、不朽の名作と称される校歌「都の西北」が誕生しました。

戦争や高度経済成長などによって社



島村抱月(大正6年頃)

会情勢が大きく変わる中、多くの校歌は歌詞を変更せざるをえなくなりました。しかし、大隈重信が提唱した「東西文化の融合」「学問の独立」「ジェンダーフリー」などは今に通じる理念であり、これを適切に現した「都の西北」は当時の姿のまま、これまで100年間歌い継がれてきました。

そして——ときは流れて大正7年11月、スペイン風邪をこじらせた抱月は47歳の若さでこの世を去りました。

葬儀に参列するため、糸魚川から上京した御風は、中村星湖から門下生総代の弔辞を頼まれます。当日朝、早稲田文学社で弔辞の原稿をしたためますが、いざ棺の前に立つと「先生の御逝去に遇ひ吾等門下全く為すべきところ、言ふべき言葉を辨せず。焼香合掌ひとへに御前にぬかづくのみ」としか言うことができませんでした。

御風が当時の心境を表した短歌3首を最後に紹介します(定本相馬御風歌集)。

- ・おもふことおほきにすぎてみひつぎにむかへどわれはおもふことなき
- ・とむらひ人にぎはふ中にまじらひてわれはも何をおもふとすらむ
- ・このわれの夢見こちのさめはててまことに泣くはいつにかあらむ